

Fate世界でだらけて過ごす

見習い蟹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

青年がテンプレ通り転生したが、余り何もしたくない彼はただ家でゴロゴロして相棒兼姉に甘やかされたり、たまに主要キャラに関わったりと日々を送る話

※初投稿です。生暖かい目で見ていってください。

私自身アニメしか見てないニワカなものですのでそれでもいいという方はどうぞ。更新は遅めです。ご了承ください。

タイトル変えました

目次

1話：Fateに来たがだらけて過ごす	1
2話	4
3話	7
4話：作戦なんてあつてないようなもの	10
5話：日常回（大して変わらない）	15
6話：読書の秋	21
7話	25
8話：にゃんぱすー	30
9話：召喚、融合……遊戯王かな？	36
10話：突撃！隣の聖杯問答	45
11話：食い物の恨みは恐ろしい	50
12話：アサシンエ	56
13話：新しい仲間（保護者）	60
14話：出会いは突然に	65
15話：ひと狩りいこうぜ!!!	70
番外編：再会	75
16話：生活リズムは大事	82

1話：F a t eに來たがだらけて過ごす

さて……どうしたものか………

目の前にはメモとペンが置いてある机があるだけで他は何もない部屋だ。まあ取り敢えずメモを読むとしよう。

『やあ、無事メモを確認できたようで安心だ。早速で悪いが君には転生をして貰いたいと思っっている。まあありきたりな話だね。転生先はランダム、特典や能力といったものはメモの裏に書いてくれ。制限はあまり無いので遠慮なく書いてくれて構わない。後は君の準備が整えば後ろに扉が出るからそこから転生出来る。』

追記・特別に特典とは別のプレゼントを用意しているので楽しみに

ふむ、安定の転生か……特典はまあこんなんでいいかな

・最強の精神力

・たとえ完全に滅ぼされたり存在ごと消されても何時かは復活する
身体

・MUGENに出てくる全ての論外キャラの耐性

・ドラえもののテキオー灯の効果を永遠に付属

・21エモンのモンガーのような絶対生物の身体、アラガミやネオのように何でもかんでも食べられる体質

・幸運や黄金律のスキルA

こんなんでいいかな、ようは死ななくて頑丈な身体だもんな。後はこれと言っていないな……よし、行こう。

着いた……のか？ いったい何処の世界なんだろうか、いやそんなことよりこれからの生活だな。取り敢えず家が用意されていると扉に

入る時に頭に入った情報にはあつたな。ここがそうかな？

そう思つて入ろうとした瞬間にドアが開けられた。

「藤宮透様ふじみやとおるでございますか？……その様子だと御本人のようですね。初めまして、私はこの度貴方様のお世話をさせていただきます。」

メアリー・スーと申します、どうぞよろしくお願い致します透様。」
なんか玄関にすぎえ美人なお姉さんが微笑みながら自己紹介している。……もしかしてこれがプレゼント？

「どうかなさいましたか？もしかして気分が優れないとか……休まれた方が……いや、まずはお熱を測りませんと。」

そうやって俺が戸惑っているうちに彼女がいつの間にかほぼ密着状態でおでこをくつつつけてきた。ていうかちよ!?!近い近い!

「あら、見た目通りウブそうな表情して、可愛いですね♪おつと失礼しました。取り敢えず家に入りましょうか。夕食でも取りながらゆつくりと説明しますので、どうぞ。」

そう言われてホイホイと彼女に案内され、晩飯を食いながら説明を受けた。飯が美味かったのは言うまでもない。

彼女曰く自分は名前の通りデウス・エクス・マキナやらメアリー・スーやらご都合主義なんかの存在らしく、俺の自堕落な生活のために来たっぽい。しかも俺と生体リンクしてるらしく、リーダーのように互いの場所や生存が確認出来るらしい。なんとも便利なことだ。整理してたらなんか眠くなってきたな……

「お休みになられますか？では一緒に寝ましょう!」

えっ？一緒に？

「はい!私は透様の趣味や性へ好みは知り尽くしているので、それを考慮した結果、添い寝という結論に至りました。もしかしてお嫌でしたか？」

いや、せつかくだし添い寝してもらおうかな、なんかそこまで言うならお言葉に甘えさせてもらおうよ。

「はい、かしこまりました……じゃあ一緒に寝よつか!弟君♪」

フア!?!弟?!

「え？だって透様は年上のお姉さんに甘えたいという願望が「それ以上いけない!!」

ほんとに知り尽くしているな……あ、そうだ、メアリーはこの世界がどの世界か分かる？

「この世界？ああ、ここはF a t e / Z e r oの世界ですが……どうかなされましたか？」

まじかよ……………

2話

「それでどうなさいますか？透様」

えっ？

「この世界の……つまりは原作に関わるかどうかです」

ああ、そういう事ね。それなんだけど関わらない方針で行こうかと思ってるんだけど、もしここが冬木の町だったら嫌でも巻き込まれそうなんだよなあ。

「かしこまりました。それはそうと透様に言わなければならぬ事がございました」

ん？何？

「透様の特典の変更された事を伝えなければなりませんでした。申し訳ありません」

そう言っただけは少し悲しそうに頭を下げる

いやいや謝ることないですって、そんな気にはしてませんから。

それよりもその変更とやらを教えてくださいませんか？

「分かりました。変更されたものはこちらです」

すると頭の中にまた情報が浮かび上がる

・不死性についてはどんな事があるかと再生し復活するが、不死殺しやそういった物を無視して消された場合はどんなに短くても100年間はかかる場合がある（例えるなら人世界・終焉変生や不死殺しハルペーなど。ただしこれは殺される度に再生速度は速くなるし、時間を早めれば短くすることも出来る。

・モンガーはテレポートの範囲は3kmだったが、これは使う程距離や精度が上がる。更に一度行った場所には距離に関係なく行けるようになってる。何でも食べられる点については食べられるものに制限は無いようにしてある。ついでに何も飲まず食わずでも生きていける。

・精神力についてはどのような状況にもある程度耐えられるというもの（ただし性格はそのままにしてある為驚いたり狼狽えたりする

が、死体やその他不快なものには余り反応しない。

・論外キヤラは耐性だけでなく基本的なステータスも込みにして
るため、身体能力も格段に上がっている。ゲージについては10本程
で、自動で全快する。ただしゲージは基本ガードやカウンターやブ
ロッキングに自動的に使われるため必殺技には使えない。

うん……………長い!!

なんというかチートという事は分かったが飲まず食わずでも生き
ていけるて……………もろ生存に特化してるような気がするなあ。まあ
願ったのは俺だけだね。

さてメアリーさんや、聞きたいことがあるんだけどいい？

「はい、何でもしようか」

メアリーさんは何か能力とかあるの？さっきご都合主義のやらデ
ウスなんちゃらとか言ってたけど…………

「はい、私は基本的に様々な能力を使えます。例えばF a t eです
から、エミヤの無限の剣製も使えますが違う点があります。それは神造
兵装なんかも投影できますし、ランクダウンもありません。他には悪
魔の実の能力の欠点である泳げなくなる点ですが、それもございま
せん。それに透様と生体リンクした際に私も透様の不死性とテキオー
灯の効果が付属されました」

何やそれ、もう何でもありやん……………こんなチートやチーターや!!
まあ冗談はさておいて、とりあえずメアリーはできる人ならぬでき
すぎる人というのが分かった。というか人なのか？

「それと透様、この近くにサーヴァントの気配を感じました。どうな
さいますか?」

3話

やっぱFGO面白いわ〜まじリスpektつすわ〜

まさか金に困らない事があるなんて人生捨てたもんじゃないもんですね。まあ人生事態が二度目だけどね!

ちなみにメアリーが俺の記憶を元に作つたらしい。ホントなんでもありだな。その内ひみつ道具でも出てきそうだ。

「透〜おやつ出来ましたよ〜」

(*・▽・*)ノ ハイイ

何だかんだいって一週間経つたがこれといって何も起きてない。

たまにセイバー達の戦いとか様子をを映像で見たり、ひたすらソシャゲに課金しまくったりしてただけだ。今の所俺がアニメで見た通りの展開だな。

最初は冬木から離れようと思ったのだが、ちよつと見てみたいなあとも思い、家から出ずに観察している。ただちよつと気になることがある。

たまには外に出ようかな?と思い始めたのだ。

確かにグータラするのは最高なんだがなんか旅行とかしてみたいんだよねえ。人間欲深いからね、仕方ないね。

という訳ですメアリーさんや

「こら、食べながらなんてお行儀が悪いですよ?ほら、口にクリームが……もう、仕方ない子ねえ」

あとメアリーさん……最初の頃よりだいぶ口調が変わった気がする。

姉のような母のような感じになってきた。

ああ〜ダメになる〜

そしてなんと、最近新しいメンバーというか家族が増えた。

「ほら、先輩?あーんしてください。食べさせてあげます。はい、あー

ん」

そう、マシユ・キリエライトである。ていうかホントに驚いた。敵襲かと思つて……もしや結界が破れて『結界ガバガバじゃねえか!!』的な展開になるかとヒヤヒヤしたぜ。ちなみにメアリーが召喚したらしい。……若干性格は違うが………カワイイからいいや。

やはりメアリーが召喚しただけあつてステータスが高い。なんだよこれヘラクレレス並じゃねえか!しかも耐久と敏捷がEXだし!魔法改造もいい加減にしろ!!

まあいいんだけどね。これでオールEとかだつたら貧弱つてレベルじゃねえぞ!てなるとこだった。

マシユはちよつと過保護な親みたいだ。この間たまには自分で買物しようかなとかいつて外に出ようとすると

「先輩?ハンカチとティッシュは持ちましたか?お金はちゃんと足りてますか?ホントに一人で行けますか?やつぱり昨日みたいに手を繋いで行きましようか?歩くのが辛かったらおんぶして運んであげますね♪」

ちよつと所じゃなかったな、うん。

流石に手を繋いでというのはハードルが高い、目線的な意味で。ん?あれは……

ロリ凜………だと………?

しかも隣に居るのは………確か雨生龍之介だったか
………

え!?もしかしてキャスター工房行き!?アカン、二人に甘やかされ過

ぎて唯でさえうる覚えなのにこのシーン思い出せない。

ど、どうしよう。もし凜が殺されるなんてことになったら第五次で生エミヤにサインを貰うという訳の分からない夢が！俺の理想が!!

ここは取り敢えず………メアリー!!マシユ!!来てくれ!!!

「透、何かあったのですか?もしや襲われたとか……」

「先輩、大丈夫ですか!?!怪我はしていませんか!?!ああ、一人にしてごめんなさい。怖かったですね。よしよし」

うん、こうなると思った………じゃなくて!

かくかくしかじか r y

「なるほど、それで透はあの娘を助けようというわけね?分かったわ。取り敢えず皆で変装しましょう」

ん?変装?

「単純な方法だけど、警察に変装してあの娘は警察は保護したということにするのよ」

そんなやり方でバレないのか?

「大丈夫よ、問題ないわ」

(メアリーって結構大雑把な気がする)

よし!それで行こう。マシユもそれでいいね?

「はい、指示に従います」

あ、マシユってサーヴァントだからバレないのかな?超今更だけど。

「大丈夫です。メアリーさんに受肉させてもらいましたし、魔力も遮断できます」

いつの間にそんな事を……流石ご都合主義の存在。

なら大丈夫だな、ではロリ救出作戦を開始する!!!!

4話：作戦なんてあつてないようなもの

俺達は今雨生龍之介の5m後ろにスタンバツてる。もちろんバレてない。

何故ならメアリーがマジで持ってたんだよ!!ひみつ道具をな!!それで透明マントを改造して気配遮断や熱感知、音すら漏らさない謎効果が付いてしまった。もう全部こいつ一人でいいんじゃないかな……

「先輩、それでどのタイミングで助けますか?何やらあの娘以外にも子供達がいるようですし、それにキャスターの気配を感じます。」

そうだな、余リグズグズしてられない。ここは思い切つて一気にやった方がいいか……

「透、なら私がアイツを気絶させますから貴方は子供達を、マシユは透を守りなさい。」

「了解です」

では、行動開始!

そしてメアリーが言ったそばから瞬間移動でもしたのかというよくな動きで一瞬で龍之介の背後に近づき、頭に触れた瞬間に龍之介がまるで糸が切れた操り人形のように倒れ込んだ。

すかさず凜たちの元へ駆け寄るが、余り反応がない。キャスターの仕業なのか、目が虚ろな感じでぼーっとしている。仕方が無いので抱えて行くとしよう。マシユも無言で子供達を抱えていた。後はキャスターだけが……

「龍之介え?帰ってきたのですか?」

不味い!!キャスターが!!

「ツツツ!貴様らアア!!よくも私と龍之介のCOOLなアートを

!!!

一瞬呆けた表情をしていたが状況を理解したのか、かなり怒り狂っているようだ。

ではこちらも……メアリーさん!! ヤーっしておしまい!!

バタツ

「おお……ジャンヌ……ジャンヌ!! ……私は……貴女に……
……ああ………なんという……」

え? ……マジで? ……今メアリーがキャスターと目を合わせた瞬間にキャスターが目を見開いたまんま倒れてるんだけど………何したの?

「幻術を掛けました。今頃は幻術の中でジャンヌ・ダルクに会っているはずです。ちなみにさっきのマスターには破戒すべき全ての符を使ったので、もうマスターではないです。キャスターの宝具は、どうやら自動で修復する効果を持つ魔道書らしきものでしたので、破魔の紅薔薇と必滅の黄薔薇でバラバラにしてからクリームの暗黒空間に飲み込みました。あとは私が術を解かない限り、一生幻術は効いたままです。その内消えます」

うわあ……マジで宝具を投影してるし、つかスタンドも使えるのかよ!! ああもう無茶苦茶だよ……

まあいいや、とにかく子供達とロリ凜は無事だったんだから良しとしよう！うん！……………

取り敢えず警察を呼んでトングラしよう。もしロリ凜に顔とか万が一覚えられたら嫌な予感しかないしね。それに集中力が切れたのか腹が減ってしょうがない。……………そういえば買い物途中だったな……………今から行くのは面倒だなあ。

「透？買い物なら私がするから貴方はマシユと先に帰っていいわよ？マシユ、お願いね？」

「はい、ほら先輩？帰りはおんぶしてあげますから、帰ったら一緒に風呂に入りますよ！」

ん？風呂……………ああそうだね……………入ろ……………うか

……………あれ？……………眠気が……………あ……………zzz

「あらら、大丈夫ですか先輩。疲れたんですか？仕方ないですねえ、よいしょっと」

あれ……………ここは何処？……………たしか私は「凜!!」……………お母様？

「よかったわ……警察から連絡があつて心配したのよ……ごめんね、怖い思いさせて……」

「凜……無事でよかった。すまない、私としたことが……情けない父親で済まない」

「私は大丈夫です……それよりあの人は？……」

「あの人？誰のことかな？」

遠坂家当主の遠坂時臣は気になることがあつた。娘の知らせを聞いた時は飛び出す勢いだったが、いざ冷静に考えると誰が警察に知らせたのである。調査結果によればキャスターのマスターらしき人物の拠点のようだったが、もしキャスターがその場にいたならば誰かがキャスターを無力化したという事だ。……ありえない。相手は曲がり無きにもサーヴァントだ、普通の人間が倒せるようなものではない。それか他の陣営の誰かが仕掛けたのか？被害もなしに？そんな存在がもしいるのならば……警戒する必要があるな。

「あなた？どうしたの？」

「……ああ、すまない。少し考えていてね……」

「それにしても誰が助けてくれたのかしら……もし会えたら一言でもいいからお礼を言いたいわ」

「……そうだね、きつと素晴らしい人なんだろう。」

そうだ、娘が無事ならそれでいいじゃないか。

常に優雅たれ……もし会えたら遠坂の最高の持て成しをさせてもらおう。

ウンまあ〜いつ!! やっぱりメアリーの作る料理は最高だぜ!!

「あ、先輩? どさくさに紛れて椎茸どかしてますね? ダメですよ! 好き嫌いしたら」

ええ… だってキノコ類嫌いなんだよ〜いいじゃん別に…

「ダメですよ! ほら、小さい欠片でもいいから食べましょう? ね? はい、あーん」

あーん……ングツ!? 吐きたい (涙)

もうゴールしてもいいよね? リバースしてもいいよね?

「ほら、ちゃんと噛んでゴックンしてください!」

うう… 死なばもろとも! ……ゴクン

「ちゃんと食べれましたね。偉いですよ先輩♪ よしよし」

くそう……メアリーは見逃してくれたのに。

こんなのあんまりだ! これが人間のやることかよお!!!

ああ〜ナデナデ心地いいんじやああ〜

5話：日常回（大して変わらん）

「ごらー!!先輩!!待ちなさい!!今日という今日は絶対に許しませんからね!!」

ヒイヒイヒイヒイ!?絶対に捕まらないからなあああ!!

ガシッ

「さあ、捕まえましたよ!帰ったらお仕置きです!!」

敏捷EXには勝てなかったよ……

イヤアアアアアアアアアアアアアアアア!?

「変な叫び声上げてもダメですよ?そもそも先輩があんなイタズラするからこうなるんですからね!」

く回想く

メアリー、時限バカ弾持つてる？あつたら大量に欲しいんだが……
「あるけど一体何に使うの？私に使っても別に構わないけどマシユに
やったりしたら怒るんじゃないかしら」

うっ……バレてたか。

まあ本当のことを言うところを英雄王とかランスロットにぶちま
けて反応が見たいんだよね。

「あら？関わらないとか言ってたじゃない。気が変わったの？」

人間は強欲なものなんですよ。という訳でマシユを実験台に色々
試そうと思います。

「はあ……まあいいわよ。（たまにはマシユに叱られなさいな（ボ
ソツ）

はい、取り敢えず10個あればいいかしら？」

十分だよ!!

よしでは早速実験開始だ!!

ふむ………マシユは朝シヤンの最中かな？ならばお風呂から上
がった瞬間を狙おう。

来た!!!
くらえ!!!……ボンツ

「あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！おれは奴の前で階段を登っ
ていたと思つたら いつのまにか降りていたな……なにを言っている
のかわからねーと思うが おれも何をされたのかわからなかった……
催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてね
え もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ」

何かジョジョ立ちしながらポルナレフ状態になってる

……………面白えええええええ!!

おつといけない。今のうちに逃げよう。

く次の日く

今日は寝起きのマシユに仕掛けたいと思いまーす。

かわいい寝顔ですねえ。いつもメアリーと一緒に寝かしててもらってる例に、ご褒美を上げましょう(ゲス顔)

オラオラオラオラオラオラア!!…………そして時は動き出す(タンマウオッチ装備)

「ウ←ル→ト←ラ←ソ←ウ←ル→ツ!!ヘーイ!!」

こんなの……………笑わずにはいられない!!

ありえん(笑) 荒ぶる鷹のポーズしながらとか笑わない方がおかしいww

さて……………たった2日だが効果がある事はもう分かった。これにて実験を終りよ「先輩?楽しかったですか?」……………あ……………

「なるほど……………状況からおかしいとは思ってましたが、メアリーさんの道具ですね?しかも私を実験台に……………貴方って人はまったく

……………そこに座りなさい。そんな事をする先輩には罰としてお尻ペンペンの刑です。勿論私の筋力をフルに活用しますので、痛いじゃすみませんよ？確かに先輩の耐性は私には破れませんが、知ってましたか？愛とギャグには不可能は無いですよ？さあ、分かったら来てください。今なら百叩きで許してあげます♪」

ふっ……抜かったなマシユ!!こんな事あるかとメアリーにチーターローションを借りていたのさ!!俺の身体能力に加えて速度はさらに増す!!フハハハハハ！捉えられまい!!

そして今、冬木の町を神速とも言える速度で走っていた。幾ら敏捷EXでも多少は撒けただろう……と思ったが………ヤバイ。マシユの奴余裕で間隔とつて来てるんですけどお!?アカン!!めっちゃ笑顔で追いかけてきてる!このままじゃ捕まる!?

こうなったら……ハッ!!

モニユ……………

よし、急停止しておっぱいを触ってマシユが驚いている間に逃げる作戦大成功dガシツ……………え?

「捕まえましたよ？せ・ん・ぱ・い♪帰ったら一万回叩きですからね？
フフフフフフフフフフ」

あ……ああ……アッアッアッアッアッアッアッアッアッ!!!

「セイバー見て。日本にはあんなカップルがいるのねえ」

「(……………私も切嗣と意思疎通が出来れば良いのですが。)」

「?……………どうしたのセイバー。何か考え事？」

「あつ……………いえ、なんでもありません。さあ、行きましょうアイリス
フィール。そろそろ時間です」

「そうね、舞弥さんもケーキが買えて嬉しそうだし、帰りましょうか」
「はい」

(それにしてもさつききの二人組……………普通の人間とは思えない動きで一瞬動いていた……………特にあの女性は下手をすればランサー以上の速さだったし、男性の方もそれに次いだものだった……………日本というのは一般人がサーヴァント級の力を有しているというのか……………日本とは恐ろしい国なのですな。)

と何故か変な勘違いをしてしまったセイバーであった。

バチンツ!!ビシツ!!ベシンツ!!!

数分後……………

ウツ…………グスツ…ヒツク…………もうやだア…………マシユなんか嫌い
だア。

「はい、これでおしまいです。よく耐えましたねえ〜先輩♪これに懲
りたらもうあんな事しませんよね?それにちゃんと事前に言ってく
れば、協力したんですよ?って叩かれ過ぎて返事も出来ませんか
…………よしよし、もうお仕置きは終わりですよ〜」

「はい、軟膏持ってきたわよ。あらら、見事に赤いわねえ」

くそう…………次はこけおどし爆弾で「先輩?」

うん…………やっぱ辞めよう。それがいいしそれでいい。

6話：読書の秋

あ、そういえばメアリー。あの後ロリ凜はどうなったの？

「今は母親と一緒に冬木を離れているわね。安心していいわよ」

ふむ、ならいいや。それと最近さあ……………

メアリーー腹筋割れてね？

いやね？よく背中流してもらってるじゃん？その時にね？チラツと後ろを見るわけですよ。そしたらなんと、見事な胸の下に立派に割れた腹筋があったではないですか。お前は大神桜かミカサかよとかは流石に口から出なかつた。

「鍛えたらこうなったのよ。仕方ないじゃない」

鍛えたならシヨウガナイネ。

まあいいや、それよりもやりたい事があるから手伝ってくれる？

「先輩、何を始めるんですか？また何かのイタズラじゃないでしょうね」そう言つて手で素振りをし始めた。

ち、違うからね!?!……………ゴホン

単刀直入に言おう。間桐臓硯を完全に殺す手伝いをして欲しいんだ。

「臓硯って、あの蟲のことね？随分と急な話だけど、どうしたの？」

ぶつちやけ八つ当たり兼おじさん延命ルートでいこうかなと。

ロリ凜を助けたのは殺されるかもしれないなかったからね。まあ俺が覚えてなかったからだけど。それにもし第五次聖杯戦争で黒桜なんかになられたら方が一とはいえマシユが取り込まれたらなんかしたら嫌だし。

「あら、私の心配はしないの？透」

いや、メアリーは取り込まれた瞬間にエクストリーム一寸法師しそうだから安心しててる。

「それもそうね」

納得しちやうんだ……………

それで問題はどうかやって臓硯を殺すかなんだが……

メアリー何かある？キャスターの時みたいにか出来る？（投げやり）

「出来るといえば出来るわね。透が気になっっているのは間桐桜の体に巢食っている本体のことでしょう？なら大丈夫、オペオペの実の能力で摘出できるわ。あとはひみつ道具や魔法を併用すれば後遺症も残さずにさっぱりよ。臓硯は強化した六赤陽陣で封じ込めてから、他の蟲ごと滅びの力で消し飛ばすわ」

うん、安定の反則具合で安心した。

なんかあんだけ意気込んだけどもう行くの面倒臭くなったからメアリー行ってきたってくれる？

なんてn「いいわよ？」……………いいの？

「ええ、そんなに時間は取らないわ。ただ今からだと昼食が作れなくなるから、マシユと外食にでも行ってきなさい。お金はあるでしょ？」

うん、大丈夫だけど……なんか心配だ。

「大丈夫よ、何かあったら連絡するから。ね？」

そう言いながら、まるで子供をあやす様に頭を撫でてくれる（いつもだけ）

分かった、そこまで言うなら任せるよ。

「じゃあ先輩、迷わないように手を繋いで行きましょう！」

? (?ω?*)??おー

マシユと昼食をとった後、俺達はある場所へ行った。

そう、図書館である。

何故来たかというと、読み聞かせの本が無くなってきたのだ。

いつもマシユが迫真の演技で猿蟹合戦を読んでもくれるから、それをキツカケに色んな昔話を読んでもらった。

最初は良かったが、段々と本（ネタが）尽きていったのである。ならば図書館で借りてこうぜということになった。

「先輩、何か読んで欲しいものありますか？あ、この間みたいにエッチな本を読ませようとしたらまたお仕置きですからね？」

や、やだなあ…そんな事す、する訳ないじゃないか（震え声）
ほ、ほらこんな本はどうか？

「恐竜図鑑ですか？これはまた変なものを選びましたねえ……」
小さい頃はよく昆虫図鑑とか見てたからさ、試しにね。

たまにこういうのもいいかなあとか。

「まあ先輩が読んで欲しいなら読みますが……ん？先輩、あれを見てください」

ん？急にどうして……おお!?あの二人は！

「ほう、見る坊主。余のことが書物に記されておるぞ!!どれ、他にも見て回ろうでわないか!!」

「いちいち本で騒ぐなよ！お前は今聖杯戦争の真っ最中だって自覚はあるのか!?大体お前h……」

あれは間違いなく征服王イスカンダル……Tシャツ来てるけど。
そしてもう一人はウェイバー・ベルベットか。
まさか図書館でライダー陣営を見掛けるとは思わなんだ。

よし！マシユ!!色紙とかあるか!!

「?……一応年のためにメアリーさんから取り寄せバッグを預かって
いますので用意はできますが……何をするつもりですか?」

ちよつと征服王にサインを貰ってくる
!!!!!!

7話

図書館を出た二人に俺は急いで声をかけた。

「すみません!! その赤髪でマッチョでなんか王様みたいなおじさん!!! サイン下さい!!」

「ん?…もしかして余のことか?」

「はい!! まるで征服王イスカンドルみたいなおじさんの事です!!」

「ほう…余のことを知っておるとは……してサインとな?」

「はい! この色紙に名前……というか署名してくれば……もしかしてダメですか? 急なことなのは分かります……」

「ですが!! ここで会えたのも何かの縁と思って!! 何卒! 何卒!!!」

「ほう……中々面白い小僧ではないか。ふむ、よろしい。署名ならばいくらでも書いてやろうぞ。ハッハッハッハ!!!」

「……つておい!? 何勝手に話を進めてるんだよお前!! 明らかに怪しいだろ!!」

「まあいいではないか、それにこの小僧は何か企む奴とは思えんのだ。征服王である余の感がそう言っておる」

「そんな曖昧な考え信用できるか! コイツは敵かもしれないんだぞ!!」

「まあ落ち着かんかマスターよ。個奴が敵ならば最初から不意をついてお主を殺すことも出来たかもしれないぞ? それに余が王であることを見抜くとは目のつけ所が良いではないか!!」

「……ああもう、勝手にしろ!! ていうかあんたは誰なんだ? 何が目的で近づいたんだ」

「だからサインを貰おうとしているんじゃないですかあ。」

「折角聖杯戦争で数々の英霊がいるんですから、サインを貰わずにはいられませんよ」

「つー聖杯戦争を知っている!? あんたは一体何者なんだ!」

「あ、そろそろ時間ですのでこれにて失礼。サインありがとうござい

ましたー!!マシユ!撤退&おんぶして。

「はい、先輩!すっかり掴まってください!!」

「あ!おい待て!!まだ話hってうお!」

「ほう……あの小娘、只者ではないと思っておったが……余の戦車に勝るとも劣らぬ速さであったな。中々面白い者達ではないか!なあ坊主!!」

「うるさい!そもそもお前が霊体化していないからこうなるんだよ!!」

「まあ今更ではないか。それにな、またあ奴等とは何処かで会う気がするのだ。その時に話を聞いても遅くはあるまい?」

「……はあ、全くお前は」

ただいまあ、メアリーいるう?

「あら、おかえりなさい。ご飯もうすぐでできるから、もう少し待ってね?」

はい。あ、マシユ。ちよつといい?

「はい、何ですか?」

えーと、そのう……なんていうか……

(……どうしよう。幸い気が付かれなかったが、マシユの背中には俺が適当にクレヨンで落書きした紙が貼り付けてある。

ちなみに絵はマシユの頭にナスを乗せたナス・キリエライトという俺の力作(笑)である。

外に出歩いている時はいつも上着を着ていたから周りには見えなかったが、俺自身すっかり忘れていた……」

「あ、もしかして背中にある貼り紙のことですか？それならメアリーさんがさつき帰ってきた時に教えてくれましたよ？………また性懲りも無くイタズラをするなんて………何回すれば気が済むんですか？いい加減にしないと、本気で怒りますよ？メアリーさんは優しいから余り怒りませんが、私は見逃しませんからね！」

ふふ、マシユさんや……何で俺がまたイタズラをしたと思うかね？

それはね？………マシユから完全に逃げ切る最強の奥の手を開発したからさ!!!

「………へえ？」

ぐっ！……目のハイライトがヤバイ事になってるが、恐れることはない!!ここでマシユにインド王☆を渡してやる!!

「また逃げるのはいいけど、ぐ飯食べてからにしないよ？」

あつハイ

よしっ！食い終わったと同時に……逃げるんだよオ！

「さあ……先輩？……楽しい楽しいお仕置きの時間ですよ？」

フウン、そう言っついていられるのも今のうちだ。

10分逃げ切ったらお仕置きはなしでいいよね？

「ええ……構いませんよ？」

絶対マシユなんかには負けたりしない(・ω・)キリッ

「ほらほら先輩、まだあと3分ありますよお……逃げなくていいんですかあ？」

「こ、こんなはずは……どうしてマシユの動きが止まらないんだ……。」

メアリーからタンマウオッチを借りて時間を止めている隙に逃げ続ける作戦が……まだまだ、まだ終わらんよ!!

こんな事もあるうかとソノウソホントを持つてきているのさー!

これで残り時間までマシユを足止めして……あれ?

何だ?……メモ?

『透へ、流石に最近のイタズラを反省してもらうために、タンマウオッチはわざと動かなくしています。ソノウソホントは逃げるのが簡単になってしまうので没収しました。あしからず』byメアリー

は……ははは……いやー参りましたよく流石はマシユだね!!

こ、今回は惜しかったなあ……なんtピキツ……ん?

「さあ……家に帰りましょうねえ♪」ゴゴゴゴ

ああ………Amen

バシン!!ベシン!!ビシ!!パアン!!ドゴオン
!!!!

アアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!

「…………やり過ぎたでしょうか……………」

「たまにはいい薬なんじゃない?明日慰めてやりなさいな」

8話：…にやんぱすー

昨日のマシユのお仕置きからまだ立ち直れていない……………
アカン……………下半身を動かすことさえできないなんて、やり過ぎだろ
!!

「流石に百万回はやり過ぎましたね。その変わり私とメアリーさんが
ちゃんとお世話しますからね。よくしよくし、いい子いい子」

ああ〜ダメになるんじやあ〜

「全く、懲りないのねえ……………それと透、昨日の事だけ」

……………あ！すっかり忘れてた!!

メアリー!!臓硯はどうなったの!?

「ああ、跡形もなく消したわよ。何故か間桐雁夜に泣くほど感謝され
たけどね……………間桐桜はちゃんと綺麗に治療したから、安心しなさい。」
ふう……………良かったあ。

「確か今日家にお礼を言いに来るから、外出しちやダメよ?」

え?…来るの?聞いてないんだけど……………

「だって透、昨日マシユに5時間もお仕置きされてたじゃない。その
後に話なんて聞けないでしょ?」

うっ……………確かにそうだ。だ、だが俺h「またペンペンされたいんです
か?」

はい……………大人しくしてます。

ピンポン

「あら、来たみたいね。マシユ、私が出るから透をお願いね?」

「はい、了解しました」

「ここがあの人の家……でいいんだよね？」

「……………」

ピンポーン　ガチャ

「あら、いらつしやい。昨日ぶりね。さあ、どうぞ」

「……お姉さん………こんにちは………」

「こんにちはは桜。お昼まだでしょ？一緒に食べない？雁夜おじさんも一緒に………ね？」

「……………うん」

「お、お邪魔します」



やあ、いらつしやい。間桐雁夜さんでいいんですね？俺は藤宮透、んでこつちが……

「マシユ・キリエライトです。よろしくお願いします」

「ああ、宜しく。早速なんだがひとこと言わせてくれ。」

桜ちゃんを救ってくれてありがとう。

そのメアリーっていう人に聞いたんだが、あんたが臓硯を殺すように送り込んだって聞いたんだ。本当に感謝してもしきれない。」

いやーこちらの都合で動いただけなんです。

お礼なんてよかったのに。

「それでも救われたのは確かだ。ありがとう」

「……ありがとう……お兄さん。おじさんを助けてくれて……」

なんだか照れますなあ。

それで？これから二人はどうするんです？まだ聖杯戦争終わってないですし、狙われるんじゃないですか？

「ああ、そうだな……桜ちゃんをこのままにしておくのは危険だ。また臓硯みたいにご利用しようとする奴が出るかもしれない」

なんなら二人共死んだことにしてどっか別の世界に行きます？

「……………は？」

いや、だからですね？お二人を事故死とかに見せかけて別の世界で暮らすんですよ。

「いや、何を言ってるんだ!!別世界!」

はい、聖杯戦争が存在しなくて、魔術もないような普通の世界に二人で引越してはどうですか？

(本当は遠坂のところに戻したりしておじさんも和解するのが一番いいんだと思うけど。そこまで他人が関わるもんじゃないしな。選ぶのは二人だ)

まあ今決めろとは言いませんよ。二人でじっくり話し合ってくれて構いません。

それに、暫くは俺達の家においた方が安全ですよ？

「……すまない。何から何まで」

いえいえ、こちらの我侷ですから。

さて、それまでオセロしようぜ!!マッシュ!!!

勝った方は負けた奴に何でも命令できるアレな!!

「またですか……飽きないですね。先輩」

「私はデザート作ってるわね。後で皆で食べましょう」
「……デザート」ジュルリ

あれ？桜ってこんな娘だったっけ？まあいいや。



「透、話があるんだ。少しいいか？」

お、決意は固まりました？

「ああ……桜ちゃんのことを尊重した結果だ。……その別世界とやらに連れていってくれ。」

……本当にいいんですね？後戻りはできませんよ？

「二言はない」

……分かりました。ならいつ出発にしますか？

「ああ、それと気になることがあるんだが。その世界では戸籍とかは大丈夫なのか？」

それは安心してもらって大丈夫です。二人は親子という事にしましたので。あとは少し田舎な所ですが、二人なら馴染めるでしょう。

「そうか……桜ちゃん。もう一回聞くけど……本当にいいんだね？」

「うん、おじさんが行くなら……私も」

あ、そうだ。メアリー！雁夜おじさんにアレを。

「分かったわ。ちよつとじつとしててね」

スウ……………ポントツ!

「なんだ?今のは」

「あなたに黄金律Bのスキルを入れたのよ。お金にはある程度困らないわ。ついでにその体の寿命とか顔色も元に戻してあげたからね」

「……………ほんとに出鱈目だな。あんた達って」

それほどでもある。

あと……………桜ちゃん?

「?……………どうしたの、透お兄ちゃん」

うつほ、お兄ちゃん呼びはなんかムズムズする……………じゃなくて!

あのさ……………頭を撫でてくれない?

「いいよ?はい、しやがんで?」

即答!?なら遠慮なく、よいしよい。

「ん……………よしよし、透お兄ちゃんいい子……………いい子」

「お前……………桜ちゃんに何やらせてるんだよ……………」

おっと思わず夢中になってしまった。では出発で宜しいですね?

「ああ、本当にありがとう。この恩は一生忘れない!!」

俺は何もしてないですよ(だってメアリーが殆どやってたし)

「透お兄ちゃん、また会える?」

ああ……………会えるよ。メアリー、頼む。

「では二人共、この扉を開ければ別世界に行けるわ。……………これを持っていきなさい。もしまた会いたくなったら、これを持っていけば、いつでも会えるわ」

「……………うん!ありがとう!またね!!お兄ちゃん、お姉ちゃん!!」

「あんたらのことは忘れない!!今度はこっちが家に招待してやるからな!!」

そう言って二人は扉の向こうへ行ってしまった。

……行っちゃったね。

そういえば別世界って結局どこにしたの？
大まかにしか俺は知らなかったけどさあ。

「のんのんびよりの世界よ」

なん・・・だと？

9話：召喚、融合……遊戯王かな？

皆で海外旅行に行こう。

「急にどうしたの？」

よくぞ聞いてくれました！この間スーパーの福引券で旅行が当たるっていうのをやってたからさ。引いてみたら当たったわけですよ。やっぱり幸運Aは伊達ではなかった。

「……………どこでもドアで行けばいいじゃないの」

うーん、それだとあっさりし過ぎてつまらないんだよなあ。

なんかこう……………いかにも旅行行ってます！って感じのさあ。

雰囲気味わいたいわけですよ。（ついでにイタズラのネタを探しながらな）

「旅行ですか……………いいですねえ。私も興味があります。

先輩へのお仕置きin海外編です！」

ちよ!?!まだ何かやるなんて言っていないからね!?

「つまり、する気はあったんですね？」

ハイ!!

「開き直らないでください。ちなみにどこに行くんですか？」

イギリスのロンドンです。この際だから生の時計塔を見たいんだよねえ。

「聖杯戦争は放っておいていいの？あれだけひみつ道具で英霊達にイ

タズラするなんて息巻いていたじゃない」

……メアリーってさあ。時間とか操れたりする？

例えば精神と時の部屋やダイオラマ球みたいに俺達が3日間旅行に行ったがこつちでは1時間とかさ。

「うーん……一応出来るわよ。多少の準備はいるけどね」

よっしゃ！それで行こうぜ！！

………まあ不安要素があるとすればどこぞのウルトラじいみ
たいな奴が気づく可能性があることだが……まあそんな奴いないだ
ろう。

現に二人別世界に送ってるし。

「ならあと一日頂戴。術式を作っておくから、それまでこれで遊んで
なさい」

おお！また新しい道具ができたのか！！

これは……指輪？

「期間限定でサーヴァントを召喚することが出来る指輪よ。魔力もそ
の指輪が肩代わりしてくれるけど、令呪もなくて、3日間で強制的に
サーヴァントが消えちゃうから注意しなさい」

これって召喚はランダム？

「一応ね。ある程度選別されるわ。まあ危害を加えるようなのは出て
こないと思うから大丈夫でしょう。念のために地下室を作っておい
たから、そこで召喚しなさい」

ほう……なら地下室で早速召喚といきましょうか。

……………一応マシユも連れていこう。

く地下室く

うわゝ結構広いな。

しかもこれって……………ボーダーの訓練室みたいだな。

ここなら大丈夫そうだ……………でも召喚ってどうやってやるんだっけ。
俺詠唱的なの覚えてないんだよなあ。

……………まあいいや、なんか来い!!!

カツ!!

うお!?!なんか光った!マジで!?!ぬる過ぎるにも程があるだろ
!?!?!?!

……………ん? ……あれ?

サーヴァントは? 一体どk 「せ、先輩!!」 どうした……………フア!?

「私、見た目が変わってしまいました……………」

変わったっていうか……………見た目完全に沖田総司じゃねえか!!!
どうしてこうなった!! どうしてこうなった!!!
ウソダンドコd 「落ち着いてください!」

……………うん、凄く落ち着いた (小並感)

と、取り敢えずメアリーに相談しよう。まだ慌てるような時間じゃない。



「完全に融合してるわね……やはり無理矢理合成したのが悪かったのかしら」

え？なにをしたの？

「指輪にちよつとした魔力炉と永遠の蛇の腕輪を合成したのだけれど………どうやら召喚された瞬間にマシユに反応して融合してみたよね。人格までは融合されなかったけれど、見た目と力だけが残された状態になってるわ」

じ、じゃあマシユは消えちゃうの？

「それが、元からマシユのものであったかのように消える心配が無いのよ。幸いにもステータスはスキルが増えたりしただけで問題ないわ。だけど、元に戻すのは難しいかもね」

マジか………

「先輩、大丈夫ですよ。見た目が多少変わっただけです。私の事は心配しないでください。ちゃんと今まで通り叱ってあげますから、ね？」

いや、最後のはイラナイデス。

………でも、これはこれでアリだな。

声はマシユだけど。

「それに、なんだかこの状態がマッチしてるのか、体が軽く感じます。これならいつもより早く先輩を捕まえられますね」

「ダニイ!?もうダメだ…おしまいだあ……………」

「とでもいうと思ったか!!やれるものならやってみるがいい!!」

「……………では旅行前に身体の試運転といきましようか」

え?いや、あの……冗談ですよ?

ほ、ほら!イタズラとか何もしてないしさ!!

「なら今して下さい」

いやあ、イタズラって言われてやるものじゃないし。

だがしかし!!マシユが言うならやってみようではないか!!

テレレツレテレー♪(時門く)

こいつは水をせき止める水門のごとく時間の流れをせき止めてゆつくりにする道具だ。

完全に閉めれば閉めている俺以外の生物や物は完全に停止する。

てかメアリーはなんで動けるんだよ……………

「自分の道具に対して対策するのは当たり前じゃない」

あつハイそうですか。

だ、だがマシユは止まったままだから成功としよう。

全く、旅行するはずだったのにこの有様だよ!

この思いをマシユ(沖田)にぶつけてやる!!

くらえ!!ボンバー!!!

そして時は動き出す（門開けながら）

「さあ、先輩は何をして……………ツツ!!」

キヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

そう叫びながらマシユは剣で空中に浮かぶ30cmサイズの玩具のゴキブリを無駄な動きなく切つていった。

かかったなアホが!!そいつで斬ると分裂するんだよ!!

そう!マシユが持っているのは半分こ刀!!半分にはなるが数は更に増える!!!

フハハハハハハハ!!これ程愉快なことがあるか!!!

ンツン~~~~~~~~♪実に!スガスガしい気分だツ!歌でもひとつ歌いたいたいようなイイ気分だ~~~~フフフフ ハハハハ!!!

最高に「ハイ!」つてやつd「こら」痛てっ。

「少しやりすぎなんじゃないの……………つてここからはマシユに怒つてもらいましょうか」

ん?今マシユはまだパニック状態で……………!!!

ゴキブリが……………全滅してる!?バカな!?3000匹はいたはずだ!!
くそう……………マシユの奴本物の刀で斬りやがったな。

「……………先輩?3000?10000にしたら幾つですか?」

え?」

「答えてください」

え、えつと……3000万？

「今からその数を先輩に叩き込みます」

………逃g「させると思ってます

か？」

は、速い!!?

「はい、捕まえましたよ先輩。流石に3000万は時間が掛かるので、秒間10000発で巻いていきますね？」

は!?!ふざけんな!機関銃と違ってレベルじゃねえぞ!!!

ミンチになるわ!!!ていうか俺の耐性無視し過ぎだろ!!!

「メアリーさんが私にギャグ補正を掛けたので大丈夫です。加減はしますから………(2割ほど)」

やめろー!!死にたくなーい!!死にたくなーい!!!!!!

「ふう……やっとなんか完成したわ。あら、なんだか凄いことになってるわね。後でスーパースローで見てください」 ● REC

10話：突撃！隣の聖杯問答

おー！ついに来たぞ!!ロンドン!!

こいつはくせえッー！魔術のにおいがプンプンする
ぜッーッーッー！

「いつになくテンションが高いわね」

「流星に飛行機の中でお仕置きは出来ませんでしたね……」

なんか段々マシユが何かに目覚めてる気がするが、まあ大丈夫だろう。

でもせつかく来たんだから、しばらくは観光してその後に時計塔を覗きに行こうぜ！

「まさか、時計塔に忍び込むの？いくら何でも少し無茶なんじゃないかしら」

まあまあ、直接行くわけじゃないから。ほら、スパイ衛星があるじゃないか。それでこつそりと「先輩？まさか女性を覗くなんてしないですよねえ？」

……こ、これはちよつとした魔術の社会科見学だから（震え声）

「それにしても些か犯罪臭がするわね」

ソナナコトハナイ（棒）

これは立派な知的好奇心による行為なのです。

それじゃあ場所を移してみんなで観ようぜ！

2時間後

ふう……………成程……………分からん!

魔術に関しては全くからつきしだしなあ。何をしてるのかさっぱりだ。

「先輩、諦めて普通に観光しましょう?せっかくの旅行なんですから」
うーん……………仕方ないか。まあここは大人しく旅行を楽しむとしよう。確か2泊3日だったから、どのくらいになるんだっけ?メアリーの時間術式の効果。

「そうねえ……………こつちで2泊3日だから、向こうでは大体2時間つてとこかしら」

おお、そりや凄い!、それなら気にせず楽しめるな。

「そういうことよ。社会科学見学(笑)ならまた出来るから、ロンドンの世界遺産でも見に行きましょう」

世界遺産かあ……………イイねイイね最っ高だねエ!!!

「先輩が深夜のテンションみたいになってきました。私は将来が心配です」

マシユはお母さんかよ!?メアリーでお腹いっぱいなんですから!

……………でも、マシユが母親とか……………その……………エロい響きですなえ(ゲス顔)

「それなら哺乳瓶とガラガラが要りますね。先輩には必要不可欠になりそうですから」

え?それ赤ちゃんに使うやつじゃ……………

「私のセト神で小さくすれば可能ね(ニヤニヤ)」

さ、さあ旅行の続きと行こうか!!

「あ、逃げた」



いや、旅行は楽しかったですねえ。桜ちゃんや雁夜おじさんのお土産も買ってきたし、今度遊びに行こうかな。

「そうね、桜も喜ぶわ。それで透？もう帰ってもいいのね？」

うん、時間も丁度いいと思うんだ。それで帰りなんだけど、メアリー……どこでもドア出して。

「だと思ったわ。全く、雰囲気を楽しみたいとか言いながら帰りは楽しみたいなんて……まあ今に始まったことじゃないけどね」

「やっぱり先輩はだらしない方が丁度いいです。お仕置きのしがいがあります」

……そのうち特に理由の無いお仕置きが俺を襲う!!

なんて事にならなきゃいいんだが。まあいいや、さっさと帰ろうぜ。

メアリーさんお願いします。

「あ、別にどこでもドアを使わなくても転移を使えば一瞬で帰れるわよ。試してみる？」

お！なんか楽しそうだな!!やろうやろう!!

………ん？その指輪いつの間に付けた「ちょ!?!触っちゃダメ!!」

カッ
!!!!!!

俺がメアリーの指輪に触れた瞬間に指輪が光った。

そして光が弱まっていくと……………

目の前にはこの間サインを書いてもらったイスカンダルとセイバー、そしてあの英雄王ギルガメッシュが聖杯問答らしきことをしていた。

……………マジかよ。

そう啞然としているとツツコミでお馴染みのウェイバーが声を上げる。

「あ、あー!!!お、お前はあの時の!!!」

「おう!あの時の署名の小僧か!!また随分と派手な登場をしたものだ。ほれ坊主、やはり儂の目に狂いはなかったであろう?ハツハツハツハツハツハ!!」

「ライダー!この少年を知っているのか!」

「フン、無粋な雑種が我の前にぞろぞろと……………」

ナニコレイミワカンナイ(棒)



雁夜&桜の食卓

桜「おじさん？好き嫌いしちや駄目だよ？」

雁夜「いや、桜ちゃん？これって……………」

桜「？…………イナゴの佃煮だよ？透お兄ちゃんがご飯に合うからつて」

雁夜「いや、なんか少しウネウネしてるのが見えるんだけど!!」

桜「ほら、食べて？あーん」

雁夜「い、嫌だ!!そんなウネウネした奴!!ヒイ!?あゝあゝあゝあゝ

あゝ!!!!…………あれ?…………旨いぞ?」

11話：食い物の恨みは恐ろしい

えっと………お久しぶりです。

「久しぶりな小僧よ！そういうえばお主の名を聞いておらんかったわ。教えてくれんか？」

あ、ふしみやおる藤宮透と言います。この間はサインをくれてありがとうございます！！

「よいよい、それよりもその二人は誰なのだ？透よ」

あ、そうだった。じゃあ二人共、自己紹介を。

「マシユ・キリエライトです。先輩がご迷惑をお掛けしました」

「初めまして、私はメアリー・スーと申します。この度はこちらのせいで混乱させてしまい申し訳ありません。お詫びと言ってはなんです
が、私の貯蔵している酒がございます。宜しければぜひ……」

「何!?酒とな!?!これは楽しみだのう」

「お前は酒に釣られ過ぎだ!!」

すかさずウエイバーがツツコミを入れる。

まあ流石に俺も警戒心緩くね?とか思っているが、イスカンドルならたとえ罠だろうと普通に飲みそうなイメージがある。

ていうかメアリーいつの間にも酒なんか用意していたんだ……

「透が寝ている間にね、たまにマシユと飲んでいるのよ。貴方お酒飲めないでしょ?」

うっ………確かにそうだ。つうかマシユ酒飲めんのかよ!

「まあ興味があつたら飲ませてあげるわね」

そう話していると、英雄王が沈黙を破り口を開いた。

「おい、女。確かメアリーとか言ったか………せめてこの俺を唸らせる程度の酒でなければ、タダでは済まんと思え」

おいおい、大丈夫なのか?嫌な予感しかしないぞ。

「大丈夫よ。では、こちらがその品でございます。サマーウイスキー太陽酒と言いまして、こちらのチーズ白菜と一緒に召し上がると丁度良く味わえます。後でデザートも用意致しますので」

おい!?それトリコの世界に出てくる酒と食材じゃねえか!!

何故メアリーが!?

「何故って……わざわざ取ってきたに決まってるじゃない。たまに調達に行ってるのよ? 勿論、私の擬似宇宙空間に保管してあるけどね」
まさか俺の知らないところでそんな事をしていたとは……

ていうかちやつかりギルさんが酒に興味もってね? なんか問答無用で串刺しにされるかと思っただけ。

「おおーこりやあ美味しい酒だ!! このチーズ白菜とやらによく合う! さつき飲んだ酒も格別だったが、これもまた最高の一品だ!!」

「確かに……かなり刺激が強い酒だが、味わい深く美味です。太陽酒か……ガウエイン卿にも飲ませてあげたいですね」

最初はこちらを睨んで警戒していたセイバーだが、酒を飲んだ途端にハマったのか、少し表情が柔らかくなっている。どうやら二人は満足してくれているようだ。

さて……問題は我様だが……

「ふむ……太陽と称しているだけはあるが、まだまだ我を唸らせるにわ足りんな。だが、多少の及第点はくれてやろう」

「お口に合って何よりです。では次にデザートの実をどうぞ。こちらはそのままスプーンで召し上がってください。マスターの皆さんには太陽酒は刺激が強すぎるので、水晶コーラをどうぞ」

「まあ、丁寧にどうも……まあ! 美味しい!」

いつの間にか場溶け込んでいたアイリスフィールが普通に楽しんでいた。

「くそお……う、美味しい……」

半場ヤケクソで飲んだウェイバーも何だかんだで馴染んでるし、中々好評のようだ。

「……透と良かったですか、貴方達は一体何者なんです? まるで何処か

らか転移したように見えたのですが」

ええつと……………旅行先のロンドンから帰ろうとしたら俺のせい
で此処に来てしまったんです……………はい。

「この透が楽して帰りたくて私に一瞬で帰る方法がないか頼んだのだ
けど、転移する際に使う指輪に透が触っちゃって……………座標がズレ
ちやったのよ」

「は？」

「ほう？」

ギル以外のサーヴァントやマスターが、そんな馬鹿なみたいな顔を
している。まあ無理もないけどね。

「はあ!? ロンドンからここまで一瞬で転移なんて出来るわけないだろ
!」

まあまあ落ち着きたまえ。メアリー、証拠になりそうなこと出来る
?

「そうねえ、やってもいいけれど……………その前にコソコソ隠れてい
るネズミが邪魔ね。消し飛ばしていいかしら」

「えっ……………な、何を言っているんだ？」

「……………ほう、お主も気づいたか」

えっ……………ネズミか何かいるの? そんなに不衛生なのかこの城は
……………

「先輩、アサシンの事ですよ。念のために私の後に」

ちよ!? マジかよ!

そうしている間に周囲がアサシンに囲まれていた。

マシユも警戒していつでも斬れるように臨戦態勢だ。

するとライダーがアサシンに声をかける。

「お、おい! まさかこいつらも誘うなんて言うんじゃ……………」

「さあ遠慮はいらぬ! 共に語り合いたい者はこの杯を取るがいい!! こ
の杯は! 貴様等の血と共にある!!」

そう言つてメアリーの太陽酒を掲げながらアサシン達に呼びかける。

だが、アサシンから返つてきたのは一本の短剣だった。アサシンによつて落とされた酒はライダーの着ているTシャツにシミを作り、それをアサシン達が嘲笑つているように見えた。

そして、その瞬間に空気は一変した……………メアリーの殺意によつて。

ズン
!!!!!!

まるで重力が何倍にもなったように、空気が重くなった。

その殺意にサーヴァント達も思わず息を呑む。

「誰だ……………私の酒を粗末にした愚かな屑は……………正直に出てこい…今なら即死で許してやる。いや、やっぱり駄目だな。皆殺しにしよう……………」

め、メアリー……………さん？

「ああ……………透は安心していいわよ……………すぐ終わるから……………ね？マシユの側にいなさい」

は、はい……………（あるえ？メアリーつてこんなだったっけ？）ガクブル

「先輩、大人しくしていきましょう。ほら、そんな小鹿みたいに震えてないで……………よしよし、怖くなーい怖くなーい。アイスキャンデーありますよ」

今だけは素直に従つておこう。本人の好きにやらせてあげようじゃないか（思考放棄）

「く!!この威圧感は!なんと!!」

「こりゃあ、ちと不味いかのう……」
「……………」

各々が反応を示した瞬間に、メアリーが動いた。

グワン
!!!!!!

空間が一瞬歪んだと思うと、辺り一面が真っ赤に染まった空間に変わる。赤く染まった空に雲、そして足元には空を反射したかのように赤い水面が地平線の彼方まで続いていた。俺達はいつの間にか巨大な人の手のようなものに乗せられていた。アサシン達を見下ろすような形で。

わかりやすく言うとうちはイタチの月詠の幻術空間とかベルセルクの舐みたいな光景。

俗に言うあれかな？フリーザ様の

『絶対にゆるさんぞ虫ケラども!!ジワジワとなぶり殺しにしてくれろ!!!』

!!?!?!
的な感じか。ていうか皆なんで黙ってるの？確かに赤すぎて目に悪そうだけどさあ。

「こ、これはまさか！固有結界?!?!そんな！サーヴァントでもないのにそんな事が!?!」

「う、嘘だろ!?!」

「只者とは思っていませんでしたが、これ程とは……」

「うむ！決めたぞ!!あ奴を余の軍門に加え「そんなこと言ってる場合か?!?!」

+!?!?!
人を除いて皆さん驚いたり興奮したりと。

「お前達の処刑方法は……そうねえ……単純に生贄にしましょうか。ただし、餌としてね」パチン

メアリーが指を鳴らすと、下の水面から何かが大量に溢れ出てくる。

「取り敢えず、1万の虚と、8千の戦車級BETA、ついでにゼノモーフも5千程度……こんなところかしら」

蹂躪が、始まうとしていた。

酒ごぼしたくらいでやり過ぎだ!!

12話：アサシンエ

それはもはや戦いとは言えなかった。

虚^{ホロウ}が魂を食らいつくし、戦車級が強靱な顎で噛み砕き、ゼノモーフがその隙間を縫うように一人、また一人と惨殺していく。

中にはゼノモーフと戦っている者もいるが、斬った部分から体液をかけられ、体を溶かされ死んでいった。

うわあ……遠目で見てもえげつないなこれは（モゴモゴ）

「先輩、食べながら喋るなんてお行儀が悪いですよ。ほら、こっち向いてください。口拭いてあげますから」

ん、ありがと……あ、このクロワツサン美味しい。

「なにお前は普通にパンなんて食べてるんだよ!!!」

「まあ落ち着いてください（モグモグ）ライダーのマスター（モグモグ）ここは下手に（モグモグ）ことを荒立てない方が（ゴックン）いいと思います」キリッ

「お前も食ってんじゃねえかああああ!!!」

ウェイバー大忙しだな。お、そろそろ終わるみたいだ。

「腐ってもサーヴァントね、一分持ちこたえたのは褒めてあげるわ。まあ……どつちにしろ殺すのだけど」スツ

メアリーが手を上げると怪物達が動きを止め、アサシン達から離れていく。生き残っているのはほんの4、5人くらいだろう。それでも凄^{サイ}いと思うが。

「お礼に、塵一つ残らず消滅させてやろう。感謝なさい」

その瞬間にメアリーの体を青白い膜のような物が覆っていく。それはどんどん大きくなり、巨大な人のような形になった。

「終わったみたいですね。先輩？そんなに震えて……あ、もしかしてビックリし過ぎて漏らしたんじゃないや……」

やめて!!そこまで酷くないから!!少しもチビってねえし!!!

「ふふ、ほんの冗談ですよ♪」

くそう！マシユのバーカバーカ！マシユマロっばい!!淫乱ピンブ
チィ……………あ…

「……………」ビキビキ

め、メアリー!!ヘルプ！ヘルプミー!!!

「……………今回は私も参戦するから覚悟しなさい」

ほ、ほら！周りにはセイバー達とかいるし……………ね？

それに家に帰ってからも……

「……………そうね。そうしましょうか」

「……………そうですね」

そして、メアリーが指を鳴らすと空間が歪み、元の空間へ戻ってきた。
た。

「コホン……………皆様、この度はご迷惑をお掛けしました。急な用事ができたので帰らせていただきます。ほら透、帰るわよ」

ちよい待って！まだやることか!!サイン貰ってない!!!

「あ、こちら！待ちなさい!!……………もう、あの子ったら」

あのうち……………セイバーさん？

「(モグモグ) どうしましたか?」

(この人まだ食ってるよ…) 出来ればサイン書いてくれると嬉しいなあなんと「構いませんよ」……………え?いいの?」

「はい、確かに最初怪しいと思っていましたが、透に関しては警戒する必要はないかと判断しました。まああの二人は別ですが」

そ、そんな簡単に決めていいのか……まあ本人がいいなら遠慮なく貰おうかな。

「ただし！条件付きです。まあ条件と言ってもそんなに難しいものではありません」

その条件は……一体……

「さつき食べたパンをお土産にください」ジュルリ

王よ……そんなのでいいのですか……

「あら、そんなに気に入ったのならいくらでも上げるわよ？」

「ツ!!メアリー!!あなたは最高です!!!」

これももう分かんねえな

13話：新しい仲間（保護者）

いや〜色々あったがなんとかなるもんですな！

サインも貰えて結構楽しめたし、中々フアインプレーだったのでは!?

「へえ……あの後家でお仕置きされてわんわん泣いたのはどこの誰かしらねえ?」

う、うるさい!それは言わないお約束だろ!?

「でも、これで主要キャラにある程度接点を持ちましたね」

「そうなのよねえ……今回は透のせいで不意を突かれたけど、万が一というのもあるから……よし、アレを使いましょう」

ん?アレって?

「透の護衛というか、親衛隊?みたいなものね」

……またなんか召喚するのか?マシユが合体するのは勘弁だぞ。

「そんな事はしないわ。今回は作るのよ、安心なさい。強さだけで言えばマシユ以上だから保障できるわ」

「……私はお払い箱ですか?」ウルウル

そ、そんな訳ないだろ!マシユには強さなんかよりもそのフワフワな母性があるじゃないか!どれだけ俺がダメ人間に拍車をかけていると思っっている!!!?

「よしよし、マシユはお払い箱なんかじゃないわよ。ほら、透もそんなに慌てないの」

え、じゃあ一体……

「取り敢えず説明より見た方が早いわね、地下室に行きましょうか。もう、そんなに泣いちゃって。よしよし、マシユは偉い子よ〜」ナゲナゲ

「グスツだつてヒックもう先輩を甘やかしたり、お仕置きしたり出来なくなると思うと、涙が止まらなくて……」

うん!どんだんやっていいからね!!(マシユが泣くなんて初めて見たぞ。)

く地下室く

そんで？その親衛隊とやらをどうやって作るんだ？

「これを使うのよ。よいしょつと」ゴトゴト

これは……………コピーロボット？

まさかこれでメアリーをコピーするなんて言うんじゃないだろうな。

「まあ見てなさい。今から作る物は多分透も知っていると違うわよ？」

俺が知ってるねえ……………コピーロボットの数は13体、サーヴァントではないって言ってたし、うーん。

俺がそう考えていると、メアリーが何処からか御札を取り出ししていた。そしてそれを1枚ずつ貼っていく。するとコピーロボットがまるで生きているかのように立ち上がってきた。

う、動いてる!?怖ッ！こ、これ本当に大丈夫なんだろうな!?

「大丈夫よ、見てて」

〈●〉〈●〉カッ!!!!!!

「何してるんですが先輩」

いや、光るタイミングでペルソナ!!ってしようと思つて……………つい。

「何ふざけてるの？もう、折角成功したんだから見ときなさいよねえ」

あ、ごめんごめん。さあて、一体何が出てくるのやら。

そこに現れたのは、全員が黒服の軍服のようなものを着ていた軍人

のようだった。中には背の低い女の子や白髪の男までと中々個人的な特徴をしている。特に目を引くのは、真ん中に佇んでる黄金とも呼べる金髪をたなびかせ、素人の俺にも分かるくらいのカリスマ的オーラを放っている長身の男。

そう、彼等こそ、黄金の獣ことラインハルト・ハイドリヒが率いる聖槍十三騎士団黒円卓その人等だ。

そしていつの間にか黒円卓の視線が俺に移っていた。

え？なにこれ怖いんですけど（ガクブル）

「大丈夫よ、皆透に忠誠を誓ってるから、逆らうどころかドン引きするくらい言うこと聞くわよ。透にもわかるように言うなら、某死の支配者が従えている階層守護者みたいな感じね。ちなみにコピーロボットの鼻を押したら元に戻るなんてことわないわ。普通に血だつて出るし、透が死なない限り永遠に存在し続ける仕組みよ。あ、ついでに言う性格までは考慮してないから気をつけてね」

うへえ……まじかあ。つまり俺がマスターってこと？

「そういう事になるわね。透が好きなた時に呼び出せるようになってるから、困った事があつたら呼ぶといいわ」

後、気になってるんだけど。水銀とハイドリヒ卿ってもしかして

……………

「勿論、二人共霸道神の状態よ。偽者だと色々弄りやすいから、存在してるだけで周りに被害が出るなんてことはないから安心して頂戴」

過剰戦力過ぎませんかねえ。

「それに、丁度家事の手伝いも欲しかったしね」

おい、それが本音なんじゃないだろうな。

「いいじゃない。透も少しは嬉しいんでしょ？さつきからチラチラ女性陣の方を見てるし、ホントにわかりやすい子ねえ」

だ、だつてさあ。まさか黒円卓が出るなんて誰も思わんだろ。いや、そんな事はいい。折角マスターになったんだから、最初の命令をだそうかなあ（ウへへ）

「うわあ……………先輩下心丸出しですわね」

「あ、言つとくけど余り女性陣の方は（ガシツ）……言わんこつちやない」

あれ？身体が動かない。何で……あ。

ちよつとしたイタズラ心で近づいた瞬間に、一瞬で後ろに回られ、肩を掴まれていた……ザミエル卿ことエレ姐さんに。

あるえ？なんかこの構図デジャヴってるような……ちよ!?小脇に抱えて何し

バチイイイイイン!!!

痛った!!?

「女性陣の人格はマシユを元に作ってるって言おうとしたんだけど、手遅れだったみたいね」

「あれ？先輩の耐性がすり抜けられていますね。またなにか付与したんですか？」

「後から気づいたんだけど、透の耐性はある条件によって貫通するこ
とが出来るのよ。一つは私、もう一つは……透に純粋な愛情と母
性を持った好みの女性の攻撃、正確には攻撃というよりはマシユが
やってるお仕置きみたいに、子供を叱るような感じね。それに対して
は素通りするみたいよ。まあ、あの子相手にそんな事出来るのは限ら
れてるでしょうね。私達を除いては」

「通りで私が強度で格上の先輩にダメージを与えられるかと思っ
たら、そういう事だったんですね」

「ええ、だから最初はマシユにギャグ補正や色々な効果を付与したの
だけけど、意味なかったみたいね」

なんでもいいから助けてええええええ
バチイイイイイイイイイイイイ
!!!!!!ええええ
!!!!

14話：出会は突然に

黒円卓（仮）をメアリーが作ったのはいいんだが、何しろ人数が凄
いためちよつと窮屈で困る。なのでメアリーに相談してみたところ
：
「それなら、一人にすればいいわね。ちよつと待ってて、すぐ終わるか
ら」

一人にする？ 一体どうやって「ほら、出来たわよ」早いよ！

「説明するわね。今はルサルカの姿だけど、他の団員にもなれるよう
に改造or融合したわ。但し、変身と言うよりは装備の変更に近い感
じね。だから黒円卓のメンバー以外のものにはなれないけれど、霸道
神2人に他の団員も擬似神格状態だし、戦力的には心配ないはずよ」
それって状況に応じてフォームチェンジするどつかのライダーみ
たいな感じか。便利になったなあ。

ん？ 待てよ……ハイドリヒ卿の能力を考えれば、わざわざ一人一人
作らなくてもよかつたんじゃないか？ 水銀は分かるとして。

「それがね？ 作ったのは良かったんだけど、総軍の中に黒円卓だけが
綺麗さっぱり居なかつたのよ。やっぱり簡単には上手くいかなかつ
たみたい。だから一人一人作るハメになって……」

（前々から思ってたけど、メアリーって案外ポンコツなのかな？ ミス
り方が某ネコ型ロボットや遠坂家のうっかり……いや、うっかりは違
うのし、例えばが浮かばない。これ以上考えるのはやめよう）

「……よろしく、マスター」

おう！ これからよろしく！ えーと、名前はどうぞしよう。

一々別の名前で言うの面倒だなあ。

………いつそ名前を変えてみるか。

「名前は好きに呼んで構わない。そうマスターが望むなら、私は従う」
うーん、なんかお堅くて真面目なイメージだな。だがこれはこれで
………ありだな。

「せーんぱーい！ お風呂湧きましたよー！」

はーい。じゃあ名前の件はまた後で。

「…マスター」

ん、どうしたの？

「……………背中、流そうか？」

え、いいの？後からやっぱり恥ずかしいとか無しだからね？

「うん、大丈夫」

よろしい……………ならばイこうではないか。まだ見ぬ未知へ。



ど う し て こ う な っ た ？

俺はてつきりルサルカの姿のまま来ると思ったら、何故かシユライバーに背中を流されていた。どういふことだつてばよ…

「…………マスターは女性に免疫がなさそうだから、この方法が最適だと判断した。ダメだった？」

やめて……………それ以上童貞の心を抉らないでくれ（涙目）

「なんで泣いてるの？よしよし、泣かない泣かない」

ちくしよう……………シユライバーに頭撫でられて慰められてる。

こんなのマシユやメアリーに見られたら「先輩…………」シャウ!?

「ええと、先輩にも色々ありますもんね！失礼しました!!」

ピシャン

待ってええええええええええええええええ!!

さて、名前を決めようか（キリッ）

「透、半泣きの顔で言ってもかっこよくないから」

くそつたれええええ!!……………まあいいや。

名前はそうだなあ……………黒田卓だからエンちゃんとかはどうだろう。

「単純過ぎて透みたいね」

いい加減泣いちやうよ?ていうかもう泣いてる。

じゃあ……………アノンとかは?まあ理由なんてないんだけど。ただポケモンのアノンももじっただけだし。

「ハア……………先輩のネーミングセンスはランクEレベルですn」それでいい……………え?」

「その名前がいい」

……………別に無理しなくてもちゃんとした名前「この名前がいい」あっはいそうですか。そこまで言うならこれから君の名前はアノンだ。

改めて宜しく、アノン。

「宜しく、マスター」ニコッ

う!?な、なんて可愛いんだ!やっぱリルサルカは可愛い（確信）

「マスター……………分かりやすい表情してる。可愛い」

「分かりますよアノンさん!このダメ人間でウブすぎて幼い子供同然の性格が先輩のいい所なんです!!」

一言も褒められた気がしないのは気のせいだろうか?

「気のせいよ。ほら、もう寝る時間でしょ。この前みたいに夜更かしなんかしたら……………分かってるわね?」

は、はい!規則正しくちゃんと寝ます!!

「……………早速アノンに見張りを任せようかしら。アノン、もし透が何かやらかしたら、容赦なく叱っていいわよ」

「了解」

……………今夜は諦めよう（ボソツ）

そうして、何も起こることはなく1日が終わった。

〽翌日〽

珍しく早起きしてしまった。隣にはベアトリス状態のアノンが寝ている。

……それにしても綺麗な髪だなあ。メアリーやマシユのは見慣れたけど、ベアトリスの髪も素晴らしい。今度ハイドリヒ卿になってもらってアホ毛触らせてもらおうかな。

ていうかハイドリヒ卿にマスターとか言われたら某赤い弓兵しか浮かばないな。うん、脳内再生余裕でした。

コンコン

ガチャ

「先輩、起きてください……おお！珍しく早起きですね！何時も起こさないで昼まで寝てる時もあったのに……ってそんなこと言ってる場合じゃなかった。先輩、お客さんです。今メアリーさんが相手をしていきますから、先輩とアノンさんも降りてきて下さい」

こんな朝に客だと？一体誰が………

「英雄王ギルガメッシュです」

.....あえ!?

15話：ひと狩りいこうぜ!!!

「フハハハ!!どうだ！我の痺れ罫は効くであろう!!おい雑種！さつさと大タル爆弾を配置せよ!!」

了解です王様!!

「あ、皆さん体力ヤバそうなので粉塵使いますね」

「誰かクローラードリンク余ってない？少し分けて欲しいんだけど」

「……狩猟笛楽しい」

俺達は今、砂漠ステージでダイミヨウザザミを狩っている。

ちなみに装備はマシユが太刀、メアリーがハンマー、アノン^アは狩猟笛で、王様は弓、そして俺が片手剣となっている。

普通ならP〇Pで5人プレイなんて出来ないが、ここには^メ都合主義^{アリ}がある。改造なんて御茶の子さいさいなのだ。

何故こんな状況になったかと言うと……

〜1時間前〜

「透、ちゃんと挨拶しなさい」

メアリーに言われ、まだ少し寝惚けている俺は何とか挨拶をする。えっと、おはようございます。

「フン、本来なら我を待たせた時点で死に値するが……この前の余興に免じて、今回は我の寛大^{オシ}さに感謝するがいい」

（……この王様なんか優しくくない？あるえ？滅多刺しにされるかと思っただのに……）

「それで、英雄王がわざわざこのような所に何の御用でしょうか」

「……用が有るのはその腑抜けている雑種だ。貴様、セイバーにサインを欲したようだな……何故だ……」

え？ああ……あの時のですか。
それが何か……

「何故我にも求めてこなかったのだ!!セイバーやライダーには頼み、あまつさえこの俺には何も言ってこないとはどういう見だ!!」答えよ!!!」

ええ………もしかして書きたかったんですか？

(俺の中で英雄王のイメージがガラリと変わったんだが)

それはすみません。あの英雄王に声を掛けるなど、私には恐れ多くて……あの時は申し訳ありませんでした。

「フン……分かれれば良い……」

(何この王様めっちゃ優しいじゃん。誰だよ慢心王とか言った奴!!俺も思ってたけどさあ!!)

じ、じゃあサイン書いてくれるんですか!?

「たわけ!この俺を誰だと思ってる!!真なる王!その我が許可する!!」

よっ!最古の英雄!!偉大なるウルクの王様!!宇宙一!

「フハハハハ!!当たり前だ!!………ん?貴様……まさか私のサインにこんな物を使うとは言わんよなあ?」

やっぱり………普通の色紙はダメでしたか?

「それなら、これを使いなさい。即興で作ったけど品質は保証できるわ」

……色紙から出てるオーラは何なんだ。

「ただの神秘を帯びた色紙よ?」

何してくれてんの!?

「よい、それを貸せ雑種。私の直筆だ。一生拝めるものではないぞ?」

そう言いながらスラスラと何処から取り出したペンか何かでサインを書いている英雄王。

(………ホントに書いてもらっちゃった……つうかめっちゃ字が綺麗

だ。読めないけど)

「ほら、お礼言わないとですよ！先輩」

ブーツとしている俺にマッシュが声を掛けて我に帰る。

あ、ありがとうございます!!一生大事にします！

「よい、それよりも貴様の手に持っているそれは何だ」

こ、これはPOPというゲーム機で……要は人間が作った娯楽の機械です。因みに今やってるのは巨大なモンスターを狩るゲームですね。

「……それは他に竜なども出るのか？」

ま、まあ出ますね。飛龍とか古龍とか大雑把に言えばですが。

「……我に貸せ、少し興味が湧いた。勘違いするでないぞ？今の人間の業がどの程度のものであるかを我の目で見るのだからな」

……じゃあ皆で狩りでも行きますか？一応通信プレイで四人までなら出来ますし。

「……何？我に有象無象と組めと？」

いえ、王様はまだやり方知らないでしょう？それに……皆でやった方が……楽しいと思います……はい。

「…………フン……呆れた奴だ……良かろう。貴様の我儘に付き合ってる。我の器量に感謝するのだな」

(何このツンデレ英雄王……もしこの人が女性だったら堕ちてたな……俺)

な、なら早速クエストに行きませんか？プレイに慣れる為にも。

「精々私の足を引っ張らぬことだな」

(んじやあ適当に……ダイミヨウザザミでいいか……)

「私はハンマーにしようかしら」

「うーん、大剣も良いですが今回は太刀で行きましょうか」

「……この狩猟笛って武器……面白そう」

そして今に至る。最初は少しもたついていた王様だが、やはり英雄王は伊達ではなく、直ぐに操作に慣れ、あつという間に俺よりもプレイが上手くなっていった。

「フハハハハ!! 所詮はカニー! この我に勝てるはずもなからう! おい雑種! 次は古龍種だ!!」

英雄王が楽しそうに何よりです。

じゃあ次はラオシャンロン行ってみますか。

あれから3時間ほど時間が過ぎ、狩りを楽しんだ俺達。

英雄王がモ○ハンを気に入ったらしく、メアリーが作った半永久的に使えるように改造したP○Pを渡した。しかも俺のとリンクしているようで、星と星の間でも通信プレイが出来るらしい。これには結構喜んでいた。

「……………そう言えば貴様等に言い忘れていたことがある」

急に英雄王の顔がカリスマモードになった。

「……………何かありましたか?」

「近々この聖杯戦争茶番も終わる。それだけだ……………まあ、ライダーは別だがな」

(普通に聖杯戦争放ったらかしにしてたわ……………)

「ではな……………腑抜け」

そう言って霊体化して消えて行った英雄王。

……………あれ? ……最後雑種じゃなくて腑抜けとか言われなかったか?

「良かったじゃない透、ある意味認められたんじゃない?」

そ、そうかなあ?

「そうですね、先輩の鈍感さがあの人にも作用したんだと思います」

……………最近マシユの当たりが強くなってる気がする。気のせいでありたい。

「ところで……………透? ……貴方ゲーム機隠し持ってたのね……………つまり夜更かしをする気があったと……………へえ?」

こ、今回はすぐに寝たので未遂です!!

「……なら今回は不問とします」
た、助かつて「但し！おやつ抜きよ」ああアあんまりだアアア!!!

「英雄王………失礼ですが何を……」

「時臣か………見ての通り狩っているのだ」

「……それは……ゲーム機……でしょうか」

「ああ……存外楽しめるものだ………これは」

（一体何をどうしたら英雄王が夢中になってゲームをしているというのだ！）

「そ、そうですか。では邪魔にならぬよう、私は失礼いたします」

ガチャン

「………少し不安になってしまった………いかんいかん。私は遠坂家当主、この程度の事で取り乱してはいけない」

一旦深呼吸をして、落ち着く………

「………胃薬を用意しておくか」

遠坂時臣は今日も優雅に一日を終える。

胃薬を片手に………

番外編：再会

今日も今日とていい天気……
最高のだらけ日和である………だが……

風 邪 を 引 い て し ま
っ た

いい加減にしたまえ……いつまで設定を無視すれば気がs「看病プレイがしたいと言ったのは先輩ですよ？」………ごめんなさい。

「メアリーさんが先輩の身体を全力で弱体化させて、数万種類の毒や呪いの類いを体内に直接注入して、ようやく普通の風邪に出来たんですから………まったく、我儘にも程があります。少しは反省して下さい」

うん………我ながらこれは酷いと思った。後でメアリーに謝る。

ところでアノンさん……背中に……そのう……胸がですね……

「当てるのよ………こう言えばいいの？」ナデナデ

頼むからリザさんの姿でそういう事するのは辞めて！

そんなに俺をおちよくるのが楽しいの!?

「はい(うん)」

ですよー

「………何バカやってんの。ほら、看病ごっこは終わり。さっさと準備して桜達に会いに行くわよ」

あ、そうだった。この間の旅行の土産を桜ちゃんとおじさんに渡してなかったつけ。

「忘れてると思ったわ。さあ、思い出したならさっさと着替えなさい。朝食出来てるから」

ん、分かった

〜出発時刻〜

なんか昔学校であった遠足みたいだ。少しワクワクする。

「先輩、楽しみなのは分かりますが何故アノンさんに肩車されてるんですか？」

……だってまだアホ毛触ってなかったんだもん。

だから敢えてアノンにハイドリヒ卿になってもらったんだ。肩車はついでだけどね。

「マスターは高所恐怖症の筈だけど……大丈夫なのか？」

いやいや、流石に肩車で一々怖がるなんて事なんか「えい」あ、ちよ!? やめて! 揺らさないで!! 落ちる! 落ちるううううう!!!

「ハイハイ。空間繋いだから、早く入っちゃいなさい」

よし、じゃあ出発!

そうして俺達は、メアリーの開いたゲートに入っていった。

〜間桐家〜

「おじさーん! 起きてー!! 朝だよー!」

「んう……桜ちゃん……あと5分寝かせて」

まったく、最近のおじさんは寝坊が多いです。いくら休みだからって、余りだらしないと……えい!

「痛っ! き、桜ちゃん!? か、髪を引っ張らないで!」

「おじさんが起きないから悪いんだよ？ほら、一緒にご飯食べよ？」

「あ、ああ……そうだね。じゃあいつも通り、一緒に作ろうか」

「うんー！」

「この家に来てから、雁夜おじさんと暮らしてもう一年が経つ……まるであの家に居た頃が嘘のようだ。今こうやって過ごしているのは夢なのではないだろうか……そう思うこともあった。

「……ただ……夢じゃない……こうやって過ごしているのは……夢なんかじゃない。」

「私は今……とても幸せだ。」

ピンポーン

「ん？誰だろう？誰か来るなんて聞いてないんだけどなあ」

「おじさん、私が出る！」

「ああ、気をつけてね」

「はーい！今出ますね！」

ガチャ

「あら、久しぶりねえ桜。少し背が伸びたんじゃない？」

「へー、ここが今の二人の家ですか。いい雰囲気ですね」

「……初めまして」

「久しぶり〜桜ちゃん。元気にしてた？」

「………やん」

ん？

「透お兄ちゃああああん!!」

ガバツ！

「うお!?と、飛びかかると思わなかったな。」

その様子だと元気そうだね。良かった良かった。

「うん！メアリーお姉ちゃんもマシユお姉ちゃんも久しぶりだね！」

「桜ちゃん、一体どうs……………まさか……………透か？それにメアリーさん達まで……………来てくれるなんて思わなかったよ。一年ぶりだな」

一年？そつちでは一年も経ったのか。

こつちとそつちでは時間の流れが違うのか？

「どうやらそうみたいね」

「まあここで話すのもなんだ、家に上がってくれ。余り持て成しも出来ないが……………」

いえいえ、こちらが急に押し掛けたんで。お気になさらず。

久しぶりに俺達は、雁夜おじさんと桜ちゃんに再会した。

二人にはちゃんとアノンを紹介して、二人が今までどう過ごしていたか、俺達の方はどうなっているんだとか、お互いの現状を話した。

「そうか……………そつちはそつちで上手くやっているんだな。わざわざお土産まで貰っちゃって。悪いな」

「気にしなくていいのよ？私も様子は気になったから、いずれ行く予定だったし」

そうそう

「先輩は完全に忘れてたじゃないですか」

「うんうん」

「……………お兄ちゃん？桜のこと忘れてたの？」

な、なんか桜の背後から少し黒いオーラが……………あ、おじさんが少し震えている。この歳から黒桜の素質があつたのか……………まあ冗談だけど。

「私を忘れるなんて……………お仕置きだね……………お兄ちゃん？」

は、ハハハハハハ！さ、桜ちゃんも冗談を言えるようになったんだね！

「桜……………ちよつとこつちに来なさい。これを……………」

「え？これ何？メアリーお姉ちゃん……………」

「これはね？……………というふうにするの」

……………さつきから二人で何話してんの？ガールズトーク？

すると、いつの間にか桜の手元には小さいバズーカのような物が置

いてあった。桜は躊躇なく自身に向けてそのバズーカの引き金を引く。

ポフン
!!!!!!

うわ!? き、桜ちゃん! 大丈夫!!

「な、なんだ! 一体何が……」

煙が晴れていく………そこには s t a y n i g h t 時の桜が立っていた。

「わあ♪ 凄いです! 本当におおきくなってます!!」

………え? 何で桜ちゃんが大きくなってんの?

まさか、メアリーの仕業か!

「あら、透も察しが早いわね」

当たり前だ! こんなこと出来るのメアリーしかないだろ!!

「大丈夫大丈夫、効果は二時間で切れるから」

そうか、なら安心だね 「透お兄ちゃん?」 ……ん?

「えい♪」

ギユウウウ

「ふふ、身長が同じになりましたね♪」

あばばばばばばばーや、柔らかい感触が! 何かいい匂いが! ち、力が抜けるう。

「何だか弟が出来たみたいですよ♪ ほーら、よしよしの刑ですからねえ?」

この後滅茶苦茶ハグハグされた

「もう帰るのか？もう少しゆっくりしてもいいんじゃない？……それに桜ちゃんだつて」

「いいえ、二人の邪魔をしちゃいけないし、それにほら……」

メアリーが指した場所には、マシユにおんぶされて眠りこけている透がいた。

「こいつは相変わらず自由だな」

「でしょう？だけど、この子にも良い所はあるから……」

「ああ……分かってる。だから桜ちゃんも懐いているからな」

「そう言ってくれると有難いです」

「……バイバイ……桜」

「うん……また……皆で来てくれる？」

「」「もちろん（です）」「」

「今度は、皆でピクニックに行こうね！」

「ふふ、楽しみにしておくわ。それじゃあ、二人ともお元気で」

「うん、バイバーイ!!」

「また来てくれ、何時でも歓迎するからな！」

こうして、少し短い再会は終わった。

く帰宅後く

……つい寝過ぎてしまった。折角桜ちゃんに会えたのに。

「また何時でも会えるでしょ？」

うん……そう……だ……ね……zzz……

「この子最近寝てばかりねえ。生活習慣が乱れるわよ？はあ、少し甘やかし過ぎかしら……」

んう……メ……ア……リ……

「？……なあに？」

……あ……りが……と……う……

「……どういたしました。ほら、またお腹出して寝てる。風邪ひくわよ……いや、それは無いわね。ま、いつか。おやすみなさい。透」

やっぱり、甘やかし過ぎね……私……

16話：生活リズムは大事

「透、起きなさい。もうすっかり暗くなったわよ」

うう……………んう……………あと5時間……………

「……………しようがないわね……………よいしょつと」

うう……………メアリーおはよう……………

「時間的にはこんばんはけどね。それにしても最近、元気ないわね。いたずらも全くしないし……………病気……………な訳ないか」

そのままお姫様抱っこ状態で運ばれていく。メアリーの言う通り、何だか何もする気が全くない。ただこうやって運ばれて、食事を食べさせてもらい、マシユに抱きついてもらいながらアノンをガン見したりと……………大して気力が出ないのだ。

「先輩……………大丈夫ですか？こうやっていたらだらするのは構いませんが、聖杯戦争の様子とか見なくてもいいんですか？」

「マスター、余り私をじつと見てると……………えーい」

わあ、お星様が見えるー(棒)

「高い高い、高い高い。元気になーれー」

「ほら、アノンさんだって先輩の事を心配してるんです。何か私達に出来ることは無いですか？」

うーん……………特にはなあ。

「……………透、それなら一緒にタイムテレビを見ましようか。そろそろ征服王と英雄王の対決が見られるわよ」

……………そつかあ……………もうそんn……………何ですと？

え？俺がグータラしている間に、すっかり終盤を迎えてるわけですかい？聖杯戦争。

「だって、関わるかどうかは透がこれをしたと言った時だけよ？あくまで私は透の意思を尊重して動くの。まあ、急を要すれば話は別なのだけどね」

「要は、先輩は今まで通り好き勝手にしていいんです。我儘言って、甘えて、ダメ人間まっしぐらの人生を満喫していればいいんです」

……………何だか少しはぐらかされた気がする。気のせいかな。

「気にしない気にしない。はい、アイスでも食べながら見ましょう。味は何がいい？」

……………チョコミントでお願いします。

『さあ目覚めろエアよ！お前に相応しい舞台が整った!!』

そうやって英雄王が掲げた剣……乖離剣を膨大な魔力が渦巻いている。それは、世界を切り裂いた剣であり、地獄そのものと言われた対界宝具。それを使う事は即ち、使うに値した相手であるということだ。

『……………ッ来るぞ!!』

ライダーもその異質さを感じ取り、より一層気を引き締める。

そして……………それは放たれた……………

『いざ仰げ!!天地乖離す開闢の星を!!!』

一瞬の輝きの後、ライダーの固有結界が音を立てて崩れていく。万

を超える数多の強者が、自らの覇道の象徴である『アイオニオンヘタイロイ王の軍勢』が、脆く崩れ去っていく。

だが、それだけで征服王は止まらない。

例え軍勢を失おうと、彼は止まることは無い。

『ライダー……』

後ろで自分のマスターの声が微かに聞こえた。

その声に答えるように、愛馬を果敢に走らせる。

駆け出すや否や、英雄王の王の財宝が展開される。ゲイトオブバビロンその数はもはや百を超えるだろう。縦断爆撃の如く発射される宝具に対して、ライダーはひたすら走る。愛馬が倒れ、身体中に宝具が突き刺さる。だが、それでも速度を落とすことなく走り続ける。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!』

力を振り絞って剣を振るう。

その死力を尽くした剣閃が、英雄王を切り裂かんとしていた。

だが、それが英雄王に届くことは無かった。天の鎖、かの盟友の名を冠したこの鎖は、神性が高いほど拘束が強まるが、それ以外のものには頑丈な鎖でしかない。

だが、低ランクとはいえ神性をもつライダーには十分に有効だった。

ドシユ

その身をエアに貫かれる征服王。最早決着はついたも同然であった。

『……………カハツ』

『…夢からは覚めたか、征服王』

『フツ……………此度の遠征もまた……………よ……………き……………もの……………であった』

『いついかなる時でも挑むがいい。ここは全て我の庭、故に保証する。ここは貴様を飽きさせることには無い』

『ははっ……………そうか……………』

(ああ……………この胸の…高鳴りこそが……………オケアノスの……………)

スウ

体が消滅していく。だが、消える寸前までライダーの顔は、少し晴れやかな表情をしているように見えた。

そして、そこで映像が途切れる。

ブツン

は？

え？ちよつと待って。今超いいところだったよね!?何!?故障なの

!!?

「はい、良い子は寝る時間ですよ。続きは録画したやつを明日見なさい」

「いやーだー!!もうちよつとみーせーてー!!!」

「先輩、余り駄々をこねちゃいけませんよ?」

俺は録画じゃなくて今見たいの今!!折角の名シーンなんだから今見ないとやだ!!!

「はいはい、ベッドに行きましょうね!」

H A ☆ N A ☆ S E !!俺は見るんだー!!!

くそ!メアリーの力が強すぎるツ!何これ全然振り解けないんだけど!?

「よしよし、今日はもう寝なさい。ほーらガラガラですよ?」

フツ……そんなもので俺が眠るわけ………ねむ………ら………
z z z

「……先輩……いくら何でも早い気がします」

「………同感。マスターはちよろい」

「こうでもしないと、あの子ずっと起きたままだと思うから、新兵器を

使わせてもらったわ」

(それでもこんなに早いのは……私も予想以上なのだけど)